東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

千葉県高等学校教育研究会地理部会編：『新しい地理の授業 高校「地理」時代に向けた提案』（書評）

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2020-06-26
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 荒井,正剛
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/159234

千葉県高等学校教育研究会地理部会編：『新しい地理の授業　高校「地理」時代に向けた提案』二宮書店，2019，222p．2,750円

必履修科目「地理総合」についての最も大きな懸念は，地理教員が絶対的に不足しているため，地理を専門としない教員が担当するケースが少なくないことである．そうした事態に対応して，本書は「地理を担当することになってしまった」歴史や公民の教員と，地理の若い教員を対象にして，「高度な知識や技術ではなく，身近な事例を用いてやさしく取り組める授業を紹介」（編集後記）することをコンセプトに編集された．

日本地理学会地理教育専門委員会も，学会があるたびに，地理総合の公開研修会を開催してきた．せっかく必履修科目となった地理総合を，生徒がおもしろい，学ぶ意義があると感じることが不可欠である．さもないと，元の木阿弥になってしまう恐れがある．

本書には設立70周年を迎えた千葉県高等学校教育研究会地理部会に所属する26名もの先生方の英知が結集している．年齢も勤務校も多様な部会員が，それぞれ「普段着」の授業実践を基にして，地理総合の趣旨に当てはめて執筆している．取り上げている資料や生徒の活動の様子が具体的に記されており，しかも，わかりやすく，語りかけるように書いてあり，初心者でも本書を参考にして授業を構想しやすい．「地理を専門とする教員が今までに培った，受け身で暗記中心の学習ではない授業実践を参考にしていただき，皆さんが持つスキルと融合させた「主体的・対話的で深い学び」を追究する授業を創り上げ，実践していただきたい」（はじめに）という願いがよく伝わってくる．

本書の構成は，地理総合の構成に沿って，3章5節で構成されている．各章の初めに概要が置かれ，単元の構成が読み取れる．

第1章「地図や地理情報システムで捉える現代世界」では，概要で一般図と主題図の歴史が記されており，歴史教員の興味を引くであろう．地図の授業では学校周辺のガイドマップやハザードマップ，地形図を用いて，生徒の関心を高めている．また，学校要覧を使った生徒の分布についての作図も興味深い．教員自身にとっても発見が多く，楽しく授業を展開できるであろう．GISの授業でも学校周辺の地理的事象を取り上げた紙上でのGISを紹介している．さらに，MANDARAを活用した統計地図作りを，そのプロセスがわかるようにかみ砕いて説明している．最後に地図を活用した千葉都市モノレール建設のシミュレーションなど交通とその歴史に関する授業実践が紹介

されている．

第2章「国際理解と国際協力」では，概要で，世界網羅的な地誌学習にしないこと，むしろ地理のプロパー教員がそれをやりがちと「自戒の念を込めて」（p. 45）述べている．まず，地理専門でない教員にとって指導しにくいとされる大気大循環とケッペンの気候区分について，前者ではストーリー性のある説明，後者では生徒に分布の規則性を発見させる展開を，それぞれ図表等を用いて具体的に説明していて，そのまま実践したくなる．次に郵便番号等の割り振りや宇宙基地の立地条件を通した位置についての学び，多国籍企業について調べた発表学習，アニメーションを使った生活の学習，地図などを使った言語・宗教の学習というように，国際理解の学習でも，生徒にとって身近な話題を活用した資料を使って生徒の関心を高めた実践が並んでいる．

国際協力については7つの地球的課題について，身近な課題を取り上げ，多様な参加型学習活動を採り入れている．前者に関して，人口問題を千葉県の人口統計を用いて自地域の課題から始めて日本に広げた発表学習を行っている．資源問題では水資源について，飲料水やバーチャルウォーターといった生徒の日常生活を見直させるような問題を様々な学習方法を通して生徒を揺さぶっている．都市問題でも生徒に身近な事例を取り上げて，「持続可能なコミュニティ」について考察させている．後者に関して，食料問題ではマインドマップづくりやフォトランゲージ，民族問題ではグループでの話し合い活動，領土問題ではロールプレイ，南北問題では貿易ゲームを採り入れて，自分たちにできることなど，解決策について考察させるなどしている．

第3章「持続可能な地域づくりと私たち」では，概要で「社会と自身とのつながりを意識し，社会へ参画するきっかけづくり」としたいと述べている．防災については，国際的な統計やゲーム教材，ハザードマップを活用して，生徒の防災意識を高める授業が提示されている．「世界津波の日」にちなんで2016年から日本で海外の高校生を含めた会議が開催され，企画・運営も高校生が深く関わっているそうである．ESDについての3つの実践はいずれも学校周辺地域を事例に，新旧地形図や写真を使って地域の変遷をとらえたり課題を発見させたり，地域の課題の解決を考えさせたりしている．そして，地域調査について，学校周辺でのフィールドワーク実践例，通学ルートを活用した仮説の検証を含めた実践例が示されている．どちらにおいても生徒が身近な地域で様々な発見などができて，とても良かったという感想が紹介されており，フィールドワークの教育的意義を改めて実感させられる．

ほかにコラムが4つある．地理専門教員ではない3名の教師が，試験問題作成での苦労，消費者教育における地理教育の可能性，地理的な視点による歴史的事象の考察について述べていて，歴史や公民の教員の共感を得るであろう．また，1名の若いと思われる地理教員が高校での地理の授業で印象に残ったカルトグラム（変形地図）について，その作成というチャレンジングな試みを紹介している．

多くの教員の実践例が紹介されているが，たとえば第2章・第3章でGISを活用した例は乏しい．それは実践が始まったばかりで，本書に求めることではなかろう．地図やGISの学習を，防災など後の学習に活かすなど，単元間の学習の関係

を考えて年間学習指導計画を立てることが読者に求められる．そのヒントがあると，より親切になったであろう．

また，中学校でも似たような実践がされていることもあり，中学校の学習内容を調べて，授業を構想する必要がある．細かいことだが，地理総合の柱は3つ（p.8）とあるが，「グローバル化」を含めて4つではないか．

本書から地理総合への理解を深めたいという思いがよく伝わってくる．本書に満載のこれまでの実践の知恵を出し合ってよりよい授業を実践していくためにも，本部会のような存在がますます重要である．教師自身がまず「主体的・対話的で深い学び」を実践すべきである．

（荒井 正剛：学部26期・院37期　東京学芸大学）